

岐阜県エコツアーリズム連携会議 第9回川と山のぎふ自然体験活動の集い 報告書

2012年12月1日（土）・2日（日）

於 岐阜県立森林文化アカデミー

目 次

実施要項	2-5
実施記録	6-18
アンケート結果	19-24
総括にかえて	25



岐阜県エコツーリズム連携会議

第9回川と山のぎふ自然体験活動の集い

実施要項

岐阜県の体験活動指導者の集い「川と山のぎふ自然体験の集い」も、9回目を迎えることができました。この集いは、体験活動の指導者の出会いと交流を主な目的にしています。

自然の宝庫、岐阜の多様な文化や歴史、人を生かした体験活動をネットワークの力でさらに活発で意義深いものに成長していくこと願っています。

今回は、各所の成功事例に学び、この世界で多くの人がさらに活発な活動をしていくことを目標にしています。また、今回は岐阜県との共同開催とし、「岐阜県エコツーリズム連携会議」として位置づけ、より広く参加を呼びかけていきたいと考えています。

県内の団体や人が集い、語り合い、知り合うことにより相互理解が深まって行けるよう、みなさんの協力と参加を期待しています。

川と山のぎふ自然体験活動の集い実行委員会

代表 北川 健司（特定非営利活動法人エヌエスネット）

■ テーマ

『人と地域の元気をつくるオンリーワン』

～成功事例から学ぶ地域づくり～

■ 日時：2012年12月1日（土）、2日（日）

■ 場所：岐阜県立森林文化アカデミー（岐阜県美濃市曾代88）

■ 参加料：1,000円（資料代、保険料など）

■ 主催：川と山のぎふ自然体験活動の集い実行委員会

入江鐵夫（行灯工房）、小野 敦（ぎふ森林づくりサポートセンター）

川尻秀樹（森林インストラクター岐阜）、北川健司（特定非営利活動法人エヌエスネット）

田村 明（朝日大学）、萩原裕作（岐阜県立森林文化アカデミー）

三宅 信（特定非営利活動法人白川郷自然共生フォーラム）

■ 共催：岐阜県

岐阜県立森林文化アカデミー

ぎふ森林づくりサポートセンター

■ 後援：特定非営利活動法人自然体験活動推進協議会（通称CONE）

■ お申込み・お問合せ

川と山のぎふ自然体験活動の集い実行委員会事務局

特定非営利活動法人エヌエスネット内 担当 高屋

〒501-8141 岐阜市月丘町5-13

TEL. 058-249-1166 FAX. 058-248-4722

E-mail : nature@odss.co.jp

第1日目(12月1日)

● 受付 12:00～森の情報センター入口

◎ 開会式 13:00～13:30

進行:田村 明(朝日大学)

◎ パネルディスカッション 13:30～15:30 テーマ『自然体験・京都、長野、石川の事例に学ぶ』

パネラー:藤原 誉(田歌舎)、辻 英之(NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター)、越石あき子(いしかわ自然学校)

コーディネーター:太田原康志(自然体験活動推進協議会事務局長)

進行:田村 明(朝日大学)

会場:森の情報センター

概要 県外団体の成功事例の紹介とその秘訣や苦労話などをお聞きするパネルディスカッションです。ここでしか聞けない役に立つお話しを一緒に聞き出しましょう。

◎ 分科会1 15:30～17:30

1. ジビエ料理—鳥の解体体験

会場:森の情報センター前

概要 いつもは食材としての一片の肉片としか向き合わない昨今、鳥の解体を通して人が生きるためにいかに食生活を成り立たせるのかを考え、そしてその技を習得してみませんか。作った料理は、夜の交流会で味わう事ができます。

講師 藤原 誉 (田歌舎)

2. 地域を巻き込んだ自然学校の展開

会場:テクニカルA(大会議室)

概要 長野県の山奥にある泰阜村で大きな産業になった、グリーンウッド。夏休み、都会から1000人以上のキャンプ参加者がある自然学校「グリーンウッド」の代表辻さん(「奇跡のむらの物語」著者)に、どのように地域と結びついた活動をやってきたか、その秘訣や苦労話、本音をお聞きます。

ゲスト 辻 英之(NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター)

3. 自然学校のネットワークによる展開

会場:テクニカルA(小会議室)

概要 2002年開校の「いしかわ自然学校」は、行政、NPO、民間事業者がネットワークを組み、自然体験プログラムを提供しています。その運営の成果と課題を掘り下げます。

ゲスト 越石あき子(いしかわ自然学校)

4. 宿泊業との協力体制による体験活動の展開

会場:風のまとい

概要 「宿泊」は、体験プログラムを充実させるだけでなく、地域にとっても様々なメリットをもたらすことから、県内の取組事例を通して、体験活動と宿泊業との利的協力の可能性について考えます。

ゲスト 笠木 哲(高山グリーンホテル)、三宅 信(トヨタ白川郷自然学校)

5. 新しい自然体験指導者制度と指導者の役割

会場:森のコテージ食堂

概要 CONEと国立青少年教育振興機構が連携・協力してつくりあげた新たな資格付与制度「全国体験活動指導者養成認定制度」が来年度からスタートするにあたり、その概要説明を受けます。

講師 太田原康志(NPO法人自然体験活動推進協議会)

◎ 情報交流会(夕食) 18:00～

会場:森の情報センター

団体紹介やアウトドア用品の交換会などゲストと共に、地域の食材を楽しみながらの交流会です。宿泊も可能(シート代1,000円)ですのでお気軽に参加ください。参加費(食事代)1,000円※飲み物など嗜好品は各自お持ちください。地域の名物の持ち込みを歓迎します。

第2日目(12月2日)

◎ 早朝プログラム 7:00～ 集合:森のコテージ前①②とも

①森林ヨガ:萩原裕作(森林文化アカデミー)

朝の森で、ヨガインストラクター西川朋子さんと一緒に、森林ヨガ体験をします(無料)

②美濃市目の字街中ウォーキング:北川健司(NPO法人エヌエスネット)

ノルディックウォーキングなどで、美濃市内や長良川沿いの美しい散歩道をウォーキングします。美濃市の歴史を語り合しましょう。途中に喫茶店モーニングも味わいます。(モーニングコーヒーセットは各自支払い)(無料)

◎ 分科会2 9:00～12:00

1. 宿泊施設と貸切バス・大学との連携による地域発信型自然学校 会場:テクニカルA(大会議室)

概要 設立から40年の歴史ある自然学校で、御嶽山山麓の68ヘクタールもの広大な敷地に宿泊施設、森林帯兼用人工林などを持つとともに、4台の貸切バスで都会から施設への旅客輸送を行っています。体験施設利用者の満足度が高く、リピーターが多いことも特徴です。施設運営のノウハウや苦労話などをお話いただきます。

ゲスト 齊藤 晃(名古屋市民おんたけ休暇村)

2. 自然学校で生きていくには ～半分自然学校・半分××～ 会場:森の情報センター

概要 京都の山奥、かやぶき屋根の民家が広がる美山町のさらに奥にある、田歌舎は自然農、ジビエ料理レストラン、猟師、大工、自然ガイドなどいくつもの顔を持つ自然学校です。代表の藤原さんも多彩なガイドですが、ここに働く若者達も半自然学校、半××で収入を得る人たちです。田歌舎の活動やさらに企てている野望を知る時間です。

ゲスト 藤原 誉(田歌舎)

3. 河原の石勉強会 会場:旧美濃橋下 長良川河原 <森の情報センター前に集合>

概要 長良川の河原の石をじっくり観察してみましょ。上流の地質をつかんでおくこと、色に惑わされずに石の顔つき(組織)を観察するのがポイントです。

講師 久保貴志(岐阜県博物館)、藤岡比呂志(関市立武儀東小学校)

4. クラフトー清流・森の恵みー 会場:森の工房

概要 <うなり木> 古代楽器のうなり木を岐阜の木で作って遊びませんか。振り回すと「ヴォンヴォン」と大きく風を切り、唸るような音がします。(入江、教材費400円)

<木の実のネイチャークリスマスリース作り> 当日材料集めに森に入ります。散策で集めた材料でリースを作ります。(垣出中、定員20名、教材費300円) * 長袖長ズボン、運動靴、持ち帰り袋、滑り止めの付いた手袋を用意してください。

講師 入江鐵夫(行灯工房)、垣出中幹夫(ネイチャークラフト工房 樹楽)

5. まこも紙漉き 会場:森のコテージ前

概要 古くから使われ皇室にも愛された「マコモ紙」。その魅力にとりつかれた千田氏からスーパー植物「マコモ」の知られざる話を聞きながら、MYマコモ紙を漉いてみませんか。(定員15名/材料費500円)

講師 千田 崇統(美濃市藤在住のまこも紙作家)

◎ 全体会 13:00～ 会場:森の情報センター

進行:田村 明(朝日大学)

・各分科会報告と大会のまとめを行います。

閉会 15:00終了予定

日程表

日付	時間	内容				
第1日目	12:00	受付:森の情報センター入口				
	13:00	開会式・オリエンテーション 会場:森の情報センター				
	13:30 15:30	パネルディスカッション 『自然体験・京都、長野、石川の事例に学ぶ』 進行:田村 明(朝日大学) コーディネーター:太田原康志(自然体験活動推進協議会事務局長) パネラー:藤原誉(田歌舎)、辻英之(NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター)、越石あき子(いしかわ自然学校) 会場:森の情報センター				
	15:30 ~ 17:30	分科会1 1. ズビエ料理 鳥の解体体験 藤原 誉(田歌舎) 会場:森の情報センター前 2. 地域を巻き込んだ自然学校の展開 辻 英之(NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター) 会場:テクニカルA(大会議室) 3. 自然学校のネットワークによる展開 越石あき子(いしかわ自然学校) 会場:テクニカルA(小会議室) 4. 宿泊業との協力体制による体験活動の展開 笠木 哲(高山グリーンホテル) 三宅信(トヨタ白川郷自然学校) 会場:風のまとい 5. 新しい自然体験指導者制度と指導者の役割 太田原康志(NPO法人自然体験活動推進協議会) 会場:森のステージ食堂				
	18:00 ~ 20:00	情報交換会(夕食) 会場:森の情報センター 団体紹介、交流会				
第2日目	7:00	早朝プログラム 1. 森林ヨガ森林ヨガ:萩原裕作(森林文化アカデミー) 2. 美濃市目の字街中ウォーキング:北川健司(NPO法人エヌエスネット)				
	9:00	1. 宿泊施設と貸切バス・大学との連携による地域発信型自然学校 齊藤 晃(名古屋市民おんたけ休暇村) 会場:テクニカルA(大会議室) 2. 自然学校で生きていくには一半分自然学校・半分×× 藤原 誉(田歌舎) 会場:森の情報センター 3. 河原の石勉強会 久保貴志(岐阜県博物館)、藤岡比呂志(関市立武儀東小学校) 会場:旧美濃橋下長良川河原 4. クラフトくうなり木・木の実のネイチャークリスマスリース作り 入江鐵夫(行灯工房)、垣出中幹夫(ネイチャークラフト工房 樹楽) 会場:森の工房 5. まこも紙漉き 千田 崇統(美濃市蕨在住のまこも紙作家) 会場:森のステージ前				
	12:00	昼食				
	13:00	全体会 進行:田村 明(朝日大学) 会場:森の情報センター ・分科会報告 ・まとめ 閉会式				
	15:00	解散				

★ テーマ共有ディスカッション

テーマ「自然体験・京都、長野、石川の事例に学ぶ」

パネラー：藤原 誉さん（京都：田歌舎）

辻 英之さん（長野：NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター）

越石 あき子さん（石川：いしかわ自然学校）

コーディネーター：太田原 康志（自然体験活動推進協議会事務局長）

報告者：齊藤 なつき（岐阜県立森林文化アカデミー）

自然学校の数が全国で約 3,700、岐阜県内に約 200 にのぼる今、この業界で「どうしたら喰っていけるのか?」、「自然学校をやっていけるといったタイミングは?」など、各団体の運営の現状や課題、裏事情を伺った。

藤原さん：アウトドア体験、解体体験、シカ肉等の販売、自給している野菜やきのこを使ったレストランを運営している。農業を大切に、建物もすべて手作りで、田舎で生活する技術をつけた。お金があればあるにこしたことはないが、お金がなくても暮らしていけるような、食料と建物の最低限の積み重ねをしてきた。半農半自然学校というけれど半分半分ではなく、互いに融合しながら食べ物からも遊びからも自然を伝えている。

辻さん：人口 1,800 人、国道も信号機もコンビニもない泰阜村。山村留学を基本にしているが、山村留学だけでは経営が成り立たないので、夏の山賊キャンプで収入を得ている。はじめは村の人たちから受け入れられなかったが、徐々に理解が深まり協力的になり、村のありのままを活かしたキャンプで集客率が伸びていった。何も無いところが、実は何だってある。儲かるまではいかないが喰っている。お金を使うような場所もないし、暮らしが仕事なので、スタッフは子どもと食事・風呂・洗濯をしながら団体でうまく生活している。

越石さん：指導者の育成から活躍できる場づくりまで、ネットワーク型の自然学校として県の予算で運営している。県のお墨付きのプログラムの中で利益をあげてもらい、継続できるような仕組みを県がバックアップするというスタンス。ネットワークを活かした広報により、効率よく募集ができています。1年で約 500 本のプログラムがある中で、中止になるのは 10 本程度。12 年続いており、2 年以内に民間へ移行するように言われているのが今後の課題。

全体の感想としては、3 団体とも興味のある内容なだけに、ディスカッションも参加者からの質問タイムも時間が足りなかった。詳しくは分科会で、となってしまったけれど全体でもう少しじっくり話す時間があればよかった。



第1日目 分科会

1. ジビエ料理—鳥の解体体験

分科会1 「ジビエ料理 鳥の解体体験」

講師：藤原 誉さん（田歌舎）

参加者：22名

記録：岡田 健一（アウトドアサポートシステム）



全員参加型の鳥の解体体験を通して、『食べる』ことについて実体験として学びました。生きている鶏が肉になるまでの過程を直接的な形で実感することは、意義のあることだったと思います。また、藤原さんが仰っていた、殺すだけは殺生・食べるならば供養という言葉がとても印象的でした。

解体の準備の手順です。

まずは2羽の鶏の胸を合わせて平行に持ち、足を交差させてヒモで縛りました。昔はワラで縛っていたのですが、鳥インフルエンザ対策の為、現在はビニールひもを使用しているとのこと。そのあと木に渡した竹に逆さに吊るします。

※鶏の年は2～3歳で、成体は養鶏場で700円～（肉は1.2kgほど取れる）

次に鶏の頭部を左手で掴みます。親指と人差し指のあいだに鶏冠をはさみ、残りの指でくちばしを持ち、刃物を赤い顎の下にあわせ引くように切る。血の量が、水道から細く出した水程度でなければ成功です。

※血抜きは作業中にまわりを汚さないために行います。頸椎を折ってしめた場合と味には大差がないとのことでした。

鶏が死んだかどうかの目安は、死ぬとは羽が開いてくるのでわかりやすい。

次に、毛むしりに移ります。熱湯を沸かし、適温に調整する。この湯に浸すことで毛根を緩めて羽を抜きやすくします。適温は70℃（若鶏は65℃）低すぎると毛が抜けず、高すぎると皮膚が破れると聞きました。

浸す時は鶏の足を持って全身を湯の中に入れ、細かく揺さぶります。

※鶏の脇の下などに油分があるため。

頭に持ち替え、手羽先の下を反対に向け浸す。最後にもう一度足から浸す。

洗った桶に水を入れて、毛のしごきに移ります。首からは上に、毛の流れに沿って。

ある程度むしってから足を切る。場所は足の平あたり。

概ね抜き終わったら、下腹部を押し糞を出します。その後、毛焼きをします。脇の下、股の下などくまなく行う。あぶるイメージではなく、かざす程度。

次に解体に取り掛かります。

時間の都合で藤原さんが行いました。かなりのスピードであったため記録は出来ませんでした。鶏を切断するのではなく、膜や筋だけを切断するコツが難しく思えました。

交流会では参加者の皆さんで解体した鶏肉料理を頂きました。1羽丸ごとのダジオーブン、さしみ、たたき、炒め物などいろいろな料理ができました。

藤原さんが最初に仰っていた通り、美味しいと感じる事が最大の体験であったと思います。



分科会 2 「地域を巻き込んだ自然学校の展開」

講 師：辻英之さん（NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター）

参加者：18人

記 録：小野敦（ぎふ森林づくりサポートセンター）

長野県泰阜村で小学生を対象とした1年間の山村留学「暮らしの学校いだらぼっち」、1000人のまちの子どもが参加する「子ども山賊キャンプ」、村人たちが中心となって立ち上げた「あんじゃね自然学校」などの運営を通じて、ヨソモノが地域の人たちに受け入れられるまでのご苦労や、「めんどうくさいことが楽しいんだ」という教育の理念、経営方法などを解りやすくお話しいただきました。



特に、最初は半信半疑だった村人が、町の子もたちが泰阜の自然の中で嬉々とする姿に触れたことにより協力的になったこと、「違いは豊かさ」という基本理念のもと、子どもたちの意思決定を多数決ではなく全員が納得するまで考えて知恵を出すことにより、少数意見を切り捨てずに考え抜く力をつけていくことなど、心に残るお話を聴くことができました。

特に私のように子を持つ親にとっては、自分の子どもをどう育てるべきかを考えるいい機会になったのではないのでしょうか。

参加者からの「いだらぼっちの卒業生の進路」についての質問に、「都会に戻って同世代の子どもたちに合わせるのは大変だったという子もいたが、都会から泰阜村に来た時のギャップに比べれば大したことはない、それよりも彼らが人生を重ねるていく上で、進路を自分で決定し切り拓いていく能力に長けていた」という辻さんの答えに、25年の実績を実感しました。



3 「自然学校のネットワークによる展開」

ゲスト：越石あきこ（いしかわ自然学校事務局）

進行：萩原ナバ裕作（森林文化アカデミー）

参加者：11名

記録：長沼慶拓（森林インストラクター岐阜）

「学校」という言葉がつくものの、ひとつの施設や事業名ではない「いしかわ自然学校」。行政、NPO、民間事業者などが広くネットワークを組み、年間500件もの多彩で豊富な自然体験プログラムを提供するようになった仕組み、成果、そしてこれからどうなっていくの？というところまで、事務局の越石さんに根ほり葉ほりお聞きしました。

○どうやったら500件も情報が集まるの？ネットワークづくりの秘訣は？

⇒「まずはやってみませんか」と事務局からスカウト。最初のハードルは低くする。既に活動している人にメリット（「県のおすみつき」と、個々では難しい「広報」）を説明する。教育委員会を通じて全ての学校や公共施設等へプログラム集が配布されるのはメリットとして大きい。

年間20日間の研修会で、同じ釜の飯を食べ、酒を飲み、新たなプログラムをともに作って実践してみる中で、事務局を含めたプログラム提供者同志の顔の見える関係による信頼が大切。

○各団体の資質（リスク）、活動における安全管理の確保はどうやっているのか？

⇒まず、研修でしっかりと意識づける。1団体の行いが自然学校全体へ影響するということ。

また、プログラム申請の際に、各窓口機関がチェックシートに基づきクオリティと安全管理体制を審査する（チェックシートはホームページで公開されているので参照してください）。

○実施結果をどのように評価し、目的にバックしているのか？

⇒研修では、運営→評価→報告が出来る人材を育成している。登録プログラム実施後、ブログ形式で公開しており、これが結果であり次への広報となる。他者評価も大事だが、自己評価も大切に考える。研修で課題や目標を設定し、PDCAサイクルでより良いプログラムにしていく。

平成13年に154件のプログラムでスタートし、平成19年に300件を超え、平成22年には500件を超え、順調に見えるいしかわ自然学校だが、実は平成25年度をもって県からの委託が終了する。県からの補助金という形になるが、他にどこから経費をとってくるか。プログラム実施団体が負担？プログラム集に広告を載せる？プログラム集の有料化？例えば「自然体験の顧客満足度調査」等の名目で他から予算を取れないか？など検討中とのことです。

決して高いとは言えない人件費で、いしかわ自然学校の事務をほぼ1人で回す越石さん。その情熱の源は、子どもたちへ親から教えてもらったことを伝えていきたい、「体験すること」の大切さを伝えたいとの想いでした。

最後に、ぜひ岐阜と石川で交流していきたいですね、とスカウトされました。中部地区全体でこういう仕組みが出来てもおもしろいですねとの提案もありました。



4 「宿泊業と協力体制による体験活動の展開」

講 師：笠木哲（高山グリーンホテル）
三宅信（トヨタ白川郷自然学校）
進 行：千葉篤志（Mother Nature）
参加者：7名
記 録：加納亜寿美（清流の国ぎふづくり推進課）

アカデミー自力建設の「風のまとい」にて分科会を行いました。室内には薪ストーブがあり、火を付けると煙突から煙がもくもくと逆流！（今シーズン初使用のせい？）急ぎよ煙突掃除と窓全開で換気をして少々寒い中での開始となりましたが、参加者の方々は情熱をもって意見を交わしました。

最初に講師の方の発表があり、高山グリーンホテルの笠木さんに、ニーズが体験・交流・本物志向に変化していることに合わせ、ホテルがエコツアーへの取り組みを行っていることを紹介していただきました。また、トヨタ白川郷自然学校の三宅さんに、環境教育として自然体験プログラムを行うために宿泊施設を開設し、村の魅力・地域資源を生かすプログラムを実施していることを紹介していただきました。



○主な意見

- ・有名な名所・名跡を見て他県の観光地へという通過型の観光が、体験プログラムを取り入れることによって滞在時間が増え、宿泊が見込めるようになる。
- ・名所・名跡・温泉・料理といった既存の観光資源以外に、自然、体験学習を新たな観光資源として発掘でき、それによって新たな客層を取り込め、宿泊客の増加が見込める。それに加えて、インタープリター、文化・歴史の解説をしてくれる方など、様々な地域の人との繋がりができて地域が活性化する。
- ・まずは地域の良さを知ってもらうことが大事。

○課題

- ・ツアーを繰り返してガイドの解説がうまくなるにつれてリピーターが増えた。口コミやフェイスブックをきっかけに申し込む人が多いこともあり、エコツアーはガイドの質に左右される部分大きい。ガイドの育成を地域一体でできる仕組み作りが重要。
- ・遂行人数に足りない、宿泊してもらえないとダメ、予約が何日前に必要なといった制約が多く、ホテルや旅館が宿泊客に気軽にエコツアーを紹介できない。ニーズに応えられるようにできれば良いと思う。
- ・自然体験だけでなく、エコツーリズム・グリーンツーリズム・観光の3つの繋がり、ネットワーク作りをして、様々なものを織り交ぜていかないと魅力あるツアーにならない。地域で考えていく必要がある。

5 「新しい自然体験活動指導者制度と指導者の役割」

ゲスト：大田原康志（NPO 法人自然体験活動推進協議会事務局長）

進行：川尻秀樹（森林文化アカデミー）

参加者：18名

記録：川尻秀樹（森林文化アカデミー）

ここでは、大田原事務局長さんから、これまでの自然体験活動推進協議会（以下、CONE）と国立青少年教育振興機構（以下、青少年機構）と連携・協力して、自然体験活動指導者に関する新たな資格付与制度を構築することとなった経緯と、その内容について説明がありました。

現時点では平成25年度の通常国会で、「自然体験活動推進法」の法案設立の見込みがあり、それによって新たに「全国体験活動指導者認定制度」が発足する。法案が成立すると都道府県は自然体験活動の基本計画を作らねばならず、それと同時に現在のCONEリーダーやインストラクター、コーディネーターの新資格への移行を平成27年度末に向けて実施する。

新しい資格制度の中では、青少年教育や学校教育における体験活動などが追加されるため、現時点で学校支援指導者講習を受講していない人は早期に受講する必要がある。またトレーナーについては、今後もCONEで一括管理するが、現在のリーダーやインストラクター、コーディネーターは名称が各々自然体験活動指導者、自然体験活動上級指導者、自然体験活動総括指導者に移行します。その他、全国体験活動指導者登録金額も変更され、今後の資格者管理も変更されます。

新制度ではこれまでの認定とは受講時間も、科目履修認定も変わり、例えばリーダーの認定には概論を22.5時間、インストラクターは実習Ⅰ22.5時間と概論Ⅱ22.5時間、そして実習Ⅱ22.5時間が必要となり、コーディネーターは概論Ⅲ22.5時間と実習Ⅲ22.5時間が必要となります。



○今後の課題

- ・現在の資格者の移行を如何にスムーズに実施するか。
- ・現在の資格者のうち学校支援指導者講習を受講していない人たちに、如何に受講を促進するのか。
- ・養成団体によって提供される科目が異なるが、それをどのように互換させるか。

○参加者の反応

- ・今まで書類が来ていたが十分理解できなかつたことが良く理解でした。
- ・大田原事務局長さんに直接お聞きして、初めて理解できた気がする。
- ・自然体験活動が法案化されて、今以上に盛んになることを期待する。

第2日目

◎ 早朝プログラム 7:00～

①森林ヨガ

講師：西川朋子(ヨガインストラクター)

「森の中でヨガしたら気持ちいいんじゃない？」という思いで
はじまった早朝森ヨガ企画。当日はインストラクターの西川さん
リードのもと、アカデミー演習林へヨガマット片手に歩いて20
分ほど登って森に入り、そこからスタート。森のなかに散らばっ
て基本ポーズの流れを自分の呼吸に意識を寄せながらじっくり
とヨガ体験。深い呼吸で森の空気をたっぷりと体内に取り込
みながら、森の地面すれすれに顔が近づけてみたり、木の幹
を見つめたり、樹幹を見上げてみたりと、森を見る視点も様々。
西川さんいわく、ヨガの語源は「つながる」という意味だとか。

早朝の1時間、たっぷり森とつながることができたのでは
ないでしょうか。是非また体験したいものです。西川さん休日
の早朝からお越しいただきありがとうございました。

(萩原 記)



②美濃市目の字街中ウォーキング

ガイド：北川健司(NPO法人エヌエスネット)

前夜の交流会にかかわらず、早朝から事前参加申し込み
の方以外にも参加があり、20名近い人数だ。ノルディックウ
ォークポールの使い方と効用、準備体操と自己紹介の後、コ
テージ前をスタートする。

国道156号線を渡り、道の駅を通り過ぎて長良川沿いの道を
歩いた。日本最古の近代つり橋、旧美濃橋でポットホールや
伝説の話をお話してから、揺れる橋を中ほどまで進み橋の上
から、美しい長良川の流れを見ていただいた。川沿いに用水
路沿いに進み川湊灯台から河原に降りて少し河原でゆっくり
佇む。

湊町から坂道を登り、目の字の街並みに入る。立派な卯建
(ウダツ)の上がる街並みに出ると歓声が上がった。早朝の街
中は人出もほとんどなく静かな街並み見学をすることができた。街並み見学後、喫茶「赤玉」という古くからの
お店でモーニングコーヒーを各自払いでいただいて冷え切った体に熱いコーヒーとモーニングサービスで心から
温まり2日のスケジュールに間に合うように急いでアカデミー校舎に戻った。(少し遅れたしまった・ごめんなさい...)

(北川 記)



第2日目 分科会

1 「宿泊施設と貸切バス・大学との連携による地域発信型自然学校」

ゲスト：斎藤 晃（名古屋市民おんたけ休暇村）

進行：田村 明（朝日大学）

参加者：8名

記録：長沼慶拓（森林インストラクター岐阜）

設立から40年もの歴史ある自然学校で、御岳山山麓の68haもの広大な敷地に宿泊施設、森林体験用人工林などを持つとともに、4台の貸し切りバスで都会から施設への旅客輸送を行っています。体験施設利用者の満足度が高く、リピーターが多いことも特徴。施設運営のノウハウや苦労話、それを乗り越えてきた工夫などを斎藤事務局長にお聞きしました。

昭和48年のスタート当初は、「宿泊施設」としての役割が主だった。途中、地震被害による施設存続の危機があったものの、高度経済成長期の右肩上がりの利用者実績で復旧予算もついた。しかし、小泉構造改革で単なる公営宿泊施設は民営化される中で、自然学校として存続が認められ、事業の軸足の転換に力を入れてきた。最近では、河村名古屋市長の方針で一旦は民間への売却という方針が、市長自らが施設での宿泊体験をした結果、一転して存続が決まるなど、自然学校や森林保護のためのソフト事業の重要性は増している。



公益財団法人へ移行するにあたり、公益事業（体験メニューなどのソフト事業）の収益が50%以上でなくてはならない一方で、名古屋市民の税が投入されているということで赤字もいけない。そういう状況の中、収益事業（宿泊、食事、貸切バス）は人材派遣を活用して割り切っている。しかし、出来る限り施設側の理念（例えば、地元食の提供など）を反映させるために、完全には外部委託にはしていない。来年以降、旅行業への参入を計画しており、公益事業とのバランスを考えながら、経営面の強化を図っていく。

公益事業の中で最も力を入れている青少年健全育成事業では、名古屋市内の全学校、全児童にパンフレットを配布し、年30回のキャンプで1,300人が参加する。キャンプカウンセラーとして募集する大学生は熱心で、毎週土日の研修に積極的に参加し現在80人が登録。カウンセラーのOB・OGでNPO法人を立ち上げ、現役カウンセラーをサポートする体制にまで発展している。ただ、近年、大学生の夏休みが8月にずれ込み、小学生の夏休みと微妙にずれるため、ボランティアの募集に苦慮しており、キャンプの参加者を抑えざるを得ない状況になっている（過去には最大6,000人の年もあった）。活躍の場を求めている他の大学や社会人へボランティアの枠を広げることも検討中。

コース	A-1	A-2	B-1	B-2	B-3	C-1	C-2
対象	小1-小3	小1-小3	小4-小6	小4-小6	小4-小6	中学生	中学生
日程	2泊3日	3泊4日	3泊4日	4泊5日	5泊6日	3泊4日	4泊5日
募集	8/28-31	9/4-7	9/18-21	9/7-11	9/20-25	9/13-16	9/18-20

山岳ガイドや温泉療養士など豊富なキャリアをお持ちの斎藤さんは、常に次の一手を見据えていらっしゃるようでした。

分科会2「自然学校で生きていくには ～半分自然学校・半分××」

ゲスト：藤原 誉（田歌舎）

進行：千葉篤志（Mother Nature）

参加者：19名

記録：川尻秀樹（森林文化アカデミー）

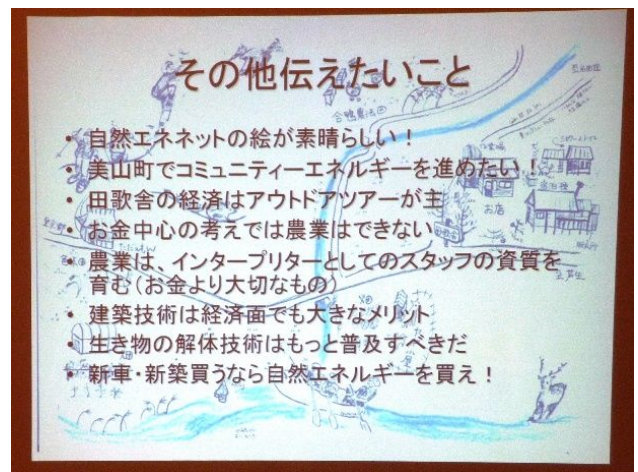
田歌舎は子どもや子育て世代、青年世代を対象に、京都府南丹市でスローフードとアウトドアを提供しています。藤原さんには、「田歌舎の自然的暮らしの実践」と称して、「遊・食・住 + エネルギーの自給」を説明してもらいました。

「食の自給」を例にとると、低農薬菜園と無農薬菜園、低農薬米と合鴨米・古代米、果樹・きのこ・山菜、狩猟（野生動物の肉利用）、家畜利用があります。藤原さんは低農薬菜園で限りなく農薬を少なくできる使い方、無農薬菜園での獣害対策と雑草による獣害防除など、農業を実践する上での知恵がてんこもりの説明でした。

このように「住環境の自給」、「エネルギーの自給」などについてもお話しを頂き、最近取り付けたソーラーパネルを事例に、「車を買換えるなら、エネルギーを買うべきだ!」と説明されました。

どの話も藤原さんが描いた理想を一つ一つ実現させたもので、最後に藤原さんは、

「お金中心で考えれば、小規模な農業は成り立たない。しかし、農業はインタープリターとしてのスタッフの資質を育む」と語られました。



○今後の課題

- ・山の斜面を利用した保冷库（室）の作成
- ・薪ボイラーの設置とお客様用のお風呂の建設
- ・石釜
- ・解体獣の残渣、生ゴミ、堆肥づくりとメタンガスプラント

○参加者の反応

- ・話を聞くだけでなく、是非、田歌舎に行ってみたい。
- ・地域にとけ込むためのノウハウの一端を知ることができて良かった。
- ・有害駆除された動物の有効利用のための技術を知ることができて参考となった。

3. 河原の石勉強会

講師：久保 貴志（岐阜県博物館）、藤岡 比呂志（関市立武儀東小学校）

参加者：12名

記録：齊藤 なつき（岐阜県立森林文化アカデミー）

アカデミーを離れ、長良川の石を見つけに新美濃橋の下の河原へくりだしました。はじめる前に、どうしてこの分科会を選んだのか参加者に尋ねると、子どもと川遊びをしているときに石の質問をされてもわからない、山の中で樹種のことは分かって石のことがわからない、林道を整備するときに石に興味を持ったなど動機は様々でした。

まずは久保先生と「河原の石ころビンゴ」のシートを使って、河原の石をじっくり観察しながら石の種類を大きく分類しました。石の模様・形には意味があり、その外見から石の本質をたどっていきます。2日目は気温が低く河原での観察会は非常に寒かったのですが、観察の最中も、参加者から今まで感じていた石に対する素朴な疑問から先生も驚くような専門的な質問まで飛び交い、話が盛り上がっていました。



次に、藤岡先生から新美濃橋周辺で見られる主な岩石の名前と見分け方を教わり、岩石を探すというゲームをしました。チャート、砂岩、礫岩、泥岩、石灰岩、緑色岩（玄武岩類）、花こう岩、花こう斑岩、流紋岩質溶結凝灰岩、安山岩の10種類で、探していくうちにちょっとずつ外見から石を見分けられるようになりました。答え合わせをして先生にオッケーといわれる度に、参加者から「やったー」という声があがりました。

石は、場所によって見た目が大きく違うため、樹木や虫のように名前を調べるのに適した図鑑があまりないというお話を聞きました。しかし、最近では地域の川ごとの図鑑が出ているそうです。

今回、新美濃橋周辺の石をちょっと見分けられるようになりましたが、場所によって表情が違うんだという石の奥の深さにも驚きました。

最後に先生方から「石を見分けるのに必要なのは知識ではなく、経験である」という一言をいただきました。今回の参加者は石の初心者からすでにご自身で勉強されている方まで幅広くいましたが、みなさんの石について知りたいという好奇心と今回学んだことを各々のフィールドで活かしたいという熱意が強く、深い学びの時間となりました。



4. クラフト—清流・森の恵み—

講師：くうなり木>入江鐵夫（行灯工房）

<木の実のネイチャークリスマスリース>垣出中幹夫（ネイチャークラフト工房 樹楽）

参加者：くうなり木>21名 <木の実のネイチャークリスマスリース>21名

記録：高屋 良平（NPO法人エヌエスネット）

くうなり木>

古代楽器のうなり木。振り回すと「ヴォンヴォン」と大きく風を切り、唸るような音がします（完成品で試させてもらいました）。はたしてうまくゆくのでしょうか。

作業の中心は、本体作り。材は県内産（入江さんは地元の素材を大切にされます）のトチ、セン、イタヤカエデ。いずれも、加工しやすく、木目が美しい。木の葉型の（あらかじめ作ってあります）素材の 頭巾（ときん、周囲のブレード部分）を紙やすりで磨くこと。丁寧に、根気よく、ひたすら磨く。ただそれだけですが、集中力と持続力といった職人には不可欠な資質を要する作業です。入江さんに



チェックしてもらいながら、最後にひもをつけて、参加者の皆さん全員が作品を完成させました。

そして、完成品の「実演」。その前に、振り回した木のブレードで「怪我をさせないように周りに人がいないことを確認します（事前の安全確認は自然体験活動の基本ですね）。試してみます。すぐにうまく音が出るケース。なかなかならないケース。個々の作品の性格や回し方など微妙な違いがあるようです。そこが自然物の手作り作品の面白いところです。結局、すべてうまく唸ってくれました。

同じモノづくりのネイチャークラフトでも、うなり木のような楽器は完成させた作品でもう一度遊ぶことができ、二度楽しむことができます。それにしてもこんな面白い遊び道具を作り出した古代人の感性は素晴らしいですね。

<木の実のネイチャークリスマスリース>

当日材料集めに森に入って散策で集める予定でしたが、高齢者に配慮して最初から垣出中さんが準備された材料でリースを作りことになりました。

材料はアケビづるを巻くで輪にしたものをベースに松ぼっくり、ドングリ、ツバキの実など野山で拾えるもの、クリスマスカラーとして彩りを添えるヒイラギの葉に赤いミズキの実、100円ショップで買えるようなりボンやベルなど、それに木の枝でトナカイをつくり、くっつけると一気に楽しくなります。素材にスプレーで銀や緑に色付けする手もありますが、垣出中さんは個人的には自然のままがいいと試してみえました（私も同感）。ただし、イベントなどでは色付けをして派手にしたほうが客の食いつきがいいとも（なるほど）。



作業に入ります。材料をホットボンド（グルーガン）を使ってアケビづるの輪にくっつけていきます。ルールは特にないので、参加者各自が思い思いに作業を進めていきます。作品そのものはもちろん、作る過程も十人十色で、そのところがとても面白い。

みんな熱心に取り組み 1 時間ほどで全員完成しました。参加者としてレポートさせていただきましたが、自分の作品についてはいろいろくっつけすぎて美的にはいまいちといった感じですが、初めてのお試しとしてはまあこんなものかといった感じです。でも、素材の面白さを感じながら、また、そこからイメージを膨らませて作り上げていく過程がとても楽しく感じられました。参加者の感想にもありましたが、今度は、是非野山で材料を見つけてくることから始めてみたいと思いました。

ネイチャークラフトの代表の様なリースづくりですが、体験してみると、誰にも楽しめる興味深いプログラムであることを実感しました。

分科会5「まこも紙漉き」

講師：千田崇統さん（美濃市蕨生在住のまこも紙作家）

参加者：12人

記録：小野 敦（ぎふ森林づくりサポートセンター）

マコモとは万能の草です。菌の寄生でできたマコモダケや、稲穂が実ってできるワイルドライスは食場として珍重され、薬用としての効用も知られています。昔からどこにでも見られた植物でしたが、河川管理上の理由で刈られたり、コンクリートの護岸工事などによって激減しているそうです。



そんな日本古来の材料を身近な道具を使って和紙にする体験を行いました。まずは、乾燥させたマコモの葉を見せていただきました。鼻に近づけると非常に良い香りがしました。二日目は非常に気温が低かったのですが、天気が良かったため屋外での作業です。

初めにトロロアオイの根を石臼で潰します。腐敗防止用のクレゾールの臭いが鼻を突きます。昔、紙漉きは農閑期の冬の仕事だったため特別な防腐処理は必要なかったのだそうです。

次にじっくり煮込んで柔らかくなったマコモの葉を石の上で潰します。黙々とゴムハンマーを叩く参加者の顔は真剣。みなさん非常に楽しかったようです。

潰したマコモの葉に、井戸水とトロロアオイを入れて混ぜると、絡まっていたマコモの繊維が攪拌されて紙漉きの材料の出来上がりです。あとは網の上に型を置いて、そこに材料を流して水分を切った後に、杉の板に乗せて乾燥させます。今日の作業はここまで。参加者の皆さんは時間ぎりぎりまで創作に勤しんでいました。

今回の感想として、こんな簡単に出来るんだという気持ちになりました。出来上がった作品の形や使い道も様々で、今後の新しいプログラムの展開が期待されます。



全体会

進行：田村 明（朝日大学）

《分科会・早朝プログラム報告》

第1日目

分科会1

1. ジビエ料理—鳥解体体験 報告者：齊藤なつき（森林文化アカデミー）
2. 地域を巻き込んだ自然学校の展開 報告者：小野 敦（ぎふ森林づくりサポートセンター）
3. 自然学校のネットワークによる展開 報告者：長沼慶拓（森林インストラクター岐阜）
4. 宿泊業との協力体制による体験活動の展開 報告者：加納亜寿美（清流の国ぎふづくり推進課）
5. 新しい自然体験指導者制度と指導者の役割 報告者：川尻秀樹（森林文化アカデミー）

第2日目

早朝プログラム

- ①森林ヨガ 報告者：萩原裕作（森林文化アカデミー）
- ②街中ウォーキング 報告者：北川健司（エヌエスネット）

分科会2

1. 旅行業と結びついた地域発信型自然学校 報告者：長沼慶拓（森林インストラクター岐阜）
2. 自然学校で生きていくには 報告者：川尻秀樹（森林文化アカデミー）
3. 河原の石勉強会 報告者：加藤裕章（アウトドアサポートシステムエコツーリズム事業部）
4. クラフト—清流・森の恵み— 報告者：高屋良平（エヌエスネット）
5. まこも紙漉き 報告者：小野 敦（ぎふ森林づくりサポートセンター）

《来賓挨拶》

トヨタ白川郷自然学校校長 浅野能昭

※ 次回「川と山ぎふ自然体験活動の集い」のはトヨタ白川郷自然学校で開催されます。

《実行委員長の言葉》

北川健司（エヌエスネット）



川と山のぎふ 自然体験活動の集い（森林文化アカデミー平成24年度短期技術研修を兼ねる）

アンケート結果

1 動機 その他

- 2 拉致にあった
- 6 紹介
- 20 県の森林サポーターとして
- 33 北川さんの紹介で
- 45 案内を頂いたから。

2 この研修で学びたいことは何ですか。

- 1 今後のテーマ作り
- 2 自然体験
- 3 半自然学校と半×の実態をしりたい
- 4 自然学校でどう生きていくのか。
- 5 自然体験活動を通じた「学びと気づき」
- 7 他の技術を盗み取る。
- 9 CONE トレーナーとして
- 10 参加者とのコミュニケーション、ネットワーク
- 11 研修の開催、進行
- 12 人集めについて
- 13 地域でくらし続けるための、しかけづくり。
- 14 山間地での教育。
- 16 新しい体験メニューのきっかけを見つけたい。
- 17 自然体験団体の状況を生で聞ける機会に参加して体験活動を実施するにあたってのノウハウを知る。
- 18 運営
- 19 ぎふ、他県で活動されている方との交流。
- 20 学校支援活動の方向を知る。
- 21 エコツアーの実例。地域を巻き込む手法など。
- 22 地域との連携方法。
- 23 自然体験を通じた生き方。他の方々との交流。
- 24 素材を生かしたプログラムの進め方。
- 25 実践できるプログラムを増やしたいので参考にしたいです。
- 26 いろいろな活動をされている皆さんの情熱や姿勢からよいエネルギーを分けて頂き、自分の成長へつなげたい。
- 27 あそびのおもしろさ(作ることも含めて)
- 28 自然相手に仕事をしている人たちの経験を知りたくて参加しました。
- 29 鳥の解体。紙すき。
- 30 指導者の認定制度の改正点。岩石の簡単な見分け方。

- 31 人を引きつけるようにそれぞれが何をされているのか知りたい。
- 33 近隣県の環境教育の実態。
- 33 自然体験の事例と生の声。安全管理。
- 35 他団体の事例
- 36 地元地域での山村留学の可能性。
- 37 今の事業に活かせるヒントを得る。
- 38 地域との連携についてのヒントを探ること。
- 39 様々な形の事例を知りたい。
- 40 野外活動の指導。石川県のような様々な体験発表。石の勉強。
- 42 森林・里山の奥深さ。
- 43 野外体験活動に関する知識・技術。ネットワーク作り。
- 44 子供に教える方法を勉強したい。
- 45 出会えた方々の活動
- 46 他の自然学校の成功事例。

3 今回の研修に参加して、得たこと・学んだことは何ですか。

- 1 CONE の未来
- 2 仲間
- 3 現在行っている体験などで気になる場所が多々あり、講師に方々と直接お話ができたのがよかった。
- 4 農業がインストラクターの資質を育つ。
- 5 いい形の自然学校。地域との関わりを持ちながら独立した形。いい加減 具合に・・・
- 6 多くの自然体験を行っている方からの情報を頂きました。
- 7 遠くの技術者の技。
- 8 地域との連携が大切ということ、インタープリターは本物にふれて自分の身につけていかなければいけないということ。
- 9 新制度は理解した。
- 11 自然学校の企画、事業経営、運営内容
- 12 地元へのアプローチ。子供の親との信頼。
- 13 テクニック、手法よりも質を高める事が大事。
- 14 幼児からステップアップ
- 16 宿泊業とグリーンツーリズムの分野が連携することで互いの得意分野で活躍することで、WIN WIN の関係をきづきあげなくてはならない(企業+地域)
- 17 何か始めてみたい気になった。
- 18 鳥の解体
- 19 地域に根ざした暮らしと体験活動。
- 20 学校支援活動改正の方向を学んだ。
- 21 辻氏の活動実例の中での、地域を巻き込む手法や考え方。
- 22 活動に活かそうだ。
- 23 半分自然学校+半分×× での生き方の手法が学べました。
- 24 鳥の解体、まこも紙すきの方法。
- 25 他の団体の方の取り組みが知れてよかったです。
- 26 活動したい → その情熱をどのように表現(姿勢)するかという思い → どのように他者の理解を得ているか

- 27 うなり木の作り方。他いろいろ
- 28 自然相手に仕事している人たちは、シビアな環境にいるにも関わらず、楽しんで仕事をしている人が多いなと感じました。
- 29 鳥の解体。 → 難しかったが、何度もチャレンジして行うことにより身に付くことを教えて頂きました。
きちんとおいしく頂くことで供養にもなる・・・ という言葉学びました。
- 30 自然体験活動の新しい制度が具体的にわかった。
川原の石がなんとなくでなく、明確にあるものについて見分けられようになった。
- 31 人への教え方。
- 32 自分に出来る事は何なのか考える会でした。
- 33 新たな出会いがありよかった。
- 34 ネットワークの作り方と仕組み、研修の運営について。
- 35 今まで知らなかったネットワーク(いしかわ自然学校)
- 36 山村留学だけでは運営できない。他事業の展開。地元の意識喚起。
- 37 公と個
- 38 地域との連携においての様々な視点を学べたこと。
- 40 CONE の組織について
- 41 自然学校で生きていくには、努力と工夫が人並み以上に必要だと感じた。
- 42 森林は宝です。
- 43 プログラムに実際に使うには難しい技術もあるが、そういうものほど魅力があると感じた。
- 44 全国体験活動指導者認定制度がわかった。
- 45 今まで自己流だった事を違う視点で見ることが出来た。
- 46 ネットワークの作り方。
- 47 制度の理解

4 今回の研修を受けて学んだことを、今後の活動の中でどのように活用しますか。

- 1 やる気ができました。
- 2 鳥
- 4 農業に取り組む
- 5 自分の居場所を見つける事が大切。次に人づくり、仲間づくり。
- 6 自然のすばらしさを次の世代に伝えて行きたいと思います。
- 7 活用する。
自分がどのような形でインタープリターとして活動できるか、色々なお話を伺って、決めていく参考になりました。
そして、子供達のために自然学校、体験活動を自分なりに機会をとらえて続けようという気持ちになりました。
- 9 リーダー講座で説明
- 11 活動メンバーの資質向上、活動企画、運営に参考にさせていただきます。
- 12 リピーターをつくる。信頼関係を結ぶ。行政との信頼関係 確立していくこと。
- 13 難しい仕組みよりも、出来る事を少しずつ積み重ねていく。
- 16 上手に地域回遊をさせるような案内をしたい。
- 18 自分でも鳥の解体をして教えたい。
- 19 暮らしを変えていくこと。
- 20 当面はない。

- 21 地域資源を活用した事業を進める中で、地域協力を得る。
- 22 ワークショップをやってみたい。
- 23 農業はインタープリターとしての資質を育む！ この言葉 自身での生き方に落とし込んですぐには実行できそうなのは農業かなと思いました。
大きな事をするのではなく、自分の畑を作る、育てる事で心が育つという事をしてみたいと思います。
- 24 各素材を使用する際にストーリーが大切だということを知り、このことをネイチャーガイドの中でのストーリー作りに応用したいと思います。
- 25 分科会でプロの仕事を経験できたので嬉しかったです。
- 26 他者の理解を得る努力をしつつ、自分らしく活動するために。
- 27 子供の広場で使いたい。
- 28 とにかく田舎に訪れてみたい。
- 29 動物のお肉を頂くということは、こんなに大変な作業がある事を伝え、食べ物大切さを伝えていければいいなあと思います。
- 30 実際の活動に活かせる。
- 32 自然の恵みでものをつくりたい。
- 33 環白山での活動につなげたいです。
- 34 自らの体験講座の運営で活用したい。
- 35 ジビエ料理などを行ってみたい。
- 36 地元で検討会を立ち上げます。
- 37 地元を持ち帰り参考に。
- 38 その視点を生かして、行動をする。
- 41 今後のプログラムの参考に出来ればと思います。
- 42 活用したいと思います。
- 43 川の石について川下りのプログラムを取り入れたい。
- 44 今後、色々な活動に活用したいと思いました。
- 45 まわりには、関心のうすい方達が多いのですが見せる事で伝えていきたい。
- 46 地域と協力して、活動をしていきたい。

研修の改善点や資料の改善点、開催時期などのご要望はありますか。

- 2 おまかせ！
- 7 道が分かりにくい。
- 7 分科会の名簿の掲示紙に(会場)名と地図を貼ってくださると便利かなと思います。
- 11 防寒対策を御願います。
- 16 会場の案内看板をしっかりとつけて欲しかった。
- 20 冬でなく秋が良い。
- 23 全体と分科会、それぞれに参加者名簿がもらえるとありがたいです。土、日は仕事(ツアー)などで参加しにくい。平日だと良いのに。
- 24 もう少しあたたかい時期に開催した方が良くと思います。
- 25 朝ごはんのことがさっぱりわからなかったの、あらかじめ教えて欲しかったです。用意してこれたので。
- 26 プログラムの詰め込みもなく、とてもんびり感じる時間がもててよかったです。
- 30 できたらもう2週間くらい早いほうがベター。
- 31 ちょっと寒かった。
- 34 よいと思います。

- 35 クリップボードが資料についていたのは便利でした。2日目の朝食などがどうなっているのかわかりにくかったです。
- 40 子供の野外活動指導。
- 41 机がないと不便だと感じた。
- 42 秋の初めの頃はどうか。
- 45 いろんな木をもっと知りたい。時期は出席しやすい時期でした。
- 46 秋の紅葉がきれいな場所。

今後、どのような技術研修を受けたいと思いますか。

- 1 指導論
- 2 木
- 7 ツリークライミング
- 4 自然学校、体験活動の色々なありかた、形を知りたい。
- 8 一からはじめる自然学校。これから作る場所を実際に自然学校を運営されている方とともに、色々なシュミレーション、リスク等出して盛り込んでいく研修。
- 10 アカデミーの技術を学んでみたい
- 11 ものづくり体験、エコツアー(ツーリズム)の研修。
- 13 インタープリター研修。
- 16 動植物の観察。
- 18 建築
- 20 具体的な自然体験メニュー
- 21 エコツアーの成功事例を知りたいです。
- 23 座学としての学習ではなく、五感を使って自然を感じる事で、自ずと学習になっているような・・・。実践や実技を通して考えさせられる。そんな研修。
- 24 木を使った研修。
- 26 いろいろな。ナバさんや川尻さん、その他いろいろな方のパワーをいろいろな技術研修を通して学びたいです。
- 27 子供を対象としたもの作りを学びたい。
- 29 プロの技を近くでみれて体験できる研修。(特に何・・・ということはないのですが)
- 30 体験型のアウトドア研修は面白い。
- 33 川での活動。
- 35 今回はまこも紙すきをさせて頂きましたが体験できる分科会を続けて欲しいです。木のスプーンとか。
- 42 全体の森林のありかた。
- 43 自然観察等
- 44 季節を通じ色々勉強したい。特に、草、木について。
- 45 雨天の時のアウトドアのプログラム。
- 46 コーディネイトに関する研修。
- 47 楽しい遊びならなんでも。

その他、ご意見・ご要望がありましたらお聞かせください。

- 5 会場の案内が分かりづらかった。
- 10 とても立派な施設です。今度ゆっくり来たいです。

- 11 弁当注文は、2日目も当日朝、注文できるよう希望します。
- 12 ありがとうございます。
- 14 ありがとうございます。
- 18 料理がおいしかったです。
- 21 色々勉強になりました。ありがとうございます。
- 23 話も聞きたい、クラフトもしたい。分科会はとても悩みます。何か良い方法はないのでしょうか？
- 26 ありがとうございます。
- 30 貴重な2日間であった。スタッフの皆様ご苦労様でした。
- 38 ありがとうございます。
- 45 今回はスラッシュ松ポックリがなかったので残念。
- 46 毎年実施してほしいです。2日間ありがとうございました。

総括に 変えて

今年で9回目の川と山のぎふ自然体験の集いが、昨年に引き続いて岐阜県立森林文化アカデミーで開催することができました。今回は岐阜県エコツーリズム連携会議というタイトルもいただき多くの方に参加いただきました。

今年のテーマを準備会で考える中で、自然体験の指導者たちが増えてくる昨今、「岐阜県内に就職先はあるのか?」、「食べていけるだけの仕事はあるのか?」、「若い人が仕事として目指せる産業か?」など議論が進みましたが、決して豊かな環境があるわけではないことも改めて認識しました。準備会では、それなら先験的な活動している団体から代表者に来ていただき、直接、話が聞ける機会を持ちたいと話が進みました。エコツーリズムを推進する岐阜県庁とも連携がとれ、ゲストの交通費を確保する予算もできました。

今回のゲストは、地域とともに暮らし、地域とともに活動して村で3番目の事業所になった長野県泰阜村のグリーンウッドの辻さん、京都府美山町で猟師と自然ガイド、大工、農業、ジビエレストランなど多様な仕事で地域とともに生きている田歌舎の藤原さん、官民が連携して石川県全体を自然学校として連携して広報している、いしかわ自然学校の越石さんを基調講演のパネラーとしてお招きしました。分科会にも多様な取り組みをしている団体や個人の方に岐阜県、長野県などから参画いただきよく学び、多くの議論をする時間を持つことができました。うまく行っている、盛んな活動をしている団体には人材がある事も改めて確認できました。思いを実現していくには人の存在が重要です。今後も、岐阜県で活動を盛んにしていくために、人と人の交流の輪を広げ、体験活動を取り組む人のいいネットワークづくりを目指し今後も活動していきたいと考えます。

参加いただいた方、ご支援いただいた方ありがとうございました。来年は、トヨタ白川郷自然学校でお会いしましょう。

川と山のぎふ自然体験の集い実行委員会
代表 北川健司（エヌエスネット）

第9回 川と山のぎふ自然体験活動の集い報告書

発行 2013年1月20日

山と川のぎふ自然体験活動の集い実行委員会
事務局

岐阜県美濃市俵町 2122
株式会社アウトドアサポートシステム
エコツーリズム事業部 内
TEL 0575-46-9232

編集責任者 高屋 良平